山口大学教育学部研究論叢　第74巻　85頁～91頁　2025年3月

概念構成図を活用したヒヤリ・ハット会議の有効性

斉藤　雅記*・吉開　佳織**

Effectiveness of Meetings Regarding Hiyari-Hatto Usirg Conceptual Configuration Diagrams

SAITO Masaki*, YOSHIKAI Kaoru**

(Received September 27, 2024)

遊具にまつわる危険性を遊具の本質として内在するハザードと、取り除くべきハザードにわけ、さらに「子どもが危険を認知できるか否か」という軸を援用し、２つの軸をクロスさせ、危険性を４つの事象として捉えた概念構成図を活用したヒヤリ・ハット会議の実施が保育者の専門性にどのような影響を与えるかを明らかにすることを目的とした。概念構成図活用前後では遊びの価値に着目した事象の数に変化があり、また保育者の考え方も禁止や環境の変更、適切な指導による対応ではなく、子どもの思いに目を向け、一緒にどうしたらいいか考えていく姿への変化がみられた。

Ⅰ　はじめに

森の幼稚園と言われている山口大学教育学部附属幼稚園は、園庭遊具だけではなく、実のなる木々や自然に住んでいる生き物たち、起伏のある森のような園庭がある。そのため、子ども達は自然豊かな環境で五感を使い遊ぶことができ、様々な感性を身につけている様子がみられる。子どもは様々な環境や道具を用いた遊びを通じて冒険や挑戦をし、心身の能力を高めていくものであり、様々な刺激に触れることの可能な園庭の環境は子どもの成長を促していくものだと考えられる。

また西田(2010)は、保育者の監督のもとではあるが、子どもに自由に遊ばせながら危険察知能力を高めさせることが重要であること、保育者の監督の視点を養う仕組み作りが必要だともしている。園庭遊具に関する研究として金子ら(2013)やミズマ(2007)は、子どもたちは園庭遊具との関わりの中で、多くの遊びを生み出し遊びのルールを作成することや、１つの遊具から多くの遊びを作り出し、共同的な遊びを通して創造性や社会性を高めることを明らかにしている。保育者も園庭や遊具などの価値を認識し、それらを通じて、のびのびとチャレンジ精神をもって遊んでもらいたいという思いがあるだろう。しかし、一方で（重篤な）怪我をされるのは困るといった思いもある。文部科学省の「幼稚園施設整備指針」では、園庭計画の遊具の項目において、子どもの興味・関心や遊びの発展性を踏まえつつも幼児の安全に配慮した４項目の指針を示している。

山口大学教育学部附属幼稚園では、子どもたちの安全面の視点から令和４年度から「園庭遊具使用の指導計画」を作成している。この指導計画は、保育室周辺を主な遊び場とし、ゾーニングにより各年齢の園児が使用する遊具を区分することで、発達に即した安全な環境のもとで体を動かす楽しさを味わえるようにすることを目的に、保育者全員が遊具の特性、使用時期、使用方法、指導事項などを共通理解し保育に役立てることを目的としたものである。そして、実態にあわせ年度末に見直しをして改善している。さらに、週１回のヒヤリ・ハット会議の時間を作り、１週間のヒヤリ・ハットの体験について情報共有、検討した。ヒヤリ・ハットとは、内閣府の「子ども・子育て支援調査研究事業　教育・保育施設における事故に至らなかった事例の収集・共有等に関する調査」の中で出てくる言葉であり、その調査の中で「1 件の重大事故の背後には、重大事故に至らなかった 29 件の軽

＊ 山口大学教育学部，〒753-0841 山口県山口市吉田 1677-1，mask@yamaguchi-u.ac.jp　＊＊ 山口大学教育学部附属幼稚園

微な事故が隠れており、さらにその背後には300件のヒヤリ・ハットが隠れているという『ハインリッヒ法則』がある。この法則から、ヒヤリ・ハット事例が施設内で報告され、改善策の共有が図れることは事故を予防する観点から非常に重要であることがわかる」と述べられている。これを参考にヒヤリ・ハット事例を共有するヒヤリ・ハット会議を実施することとした。しかし、実施していく中で保育者から「ある程度の怪我を通して怪我をしないための知識を得ている。しっかり体を使って遊ぶことで筋肉など発達し怪我をしにくくなる。」「あれもダメ、これもダメにすると子どもたちが何して遊んでいいかわからなくなる」「子どもと一緒に怪我をしないための方法を考えたい」といった疑問や意見があった。それらを踏まえ、ヒヤリ・ハット会議で出た課題について遊びの制限をかけること中心の視点の会議から、ヒヤリ・ハット会議で出た課題を通じて重篤な怪我のリスクを減らし、園庭遊具などが子どもの運動能力と危機管理能力を育て、チャレンジ精神をもって豊かに遊ぶ場としてありつづけるために考える視点の会議へ変換することとした。その際、ヒヤリ・ハット会議で出た課題を、概念構成図をもとに分類し会議の質を高めることを目指した。

野田ら(2018)は、保育者の専門性の向上については、ベテラン保育士が経験則から習得している遊具のハザードとリスクの見極めと適切な対処法を保育者全体で共有することが大切であるとしている。さらに、その理解を深めるために園庭遊具に関するハザードとリスクの概念を整理し、遊具にまつわる危険性を４象限にわけた概念構成図(図1)を作成している。

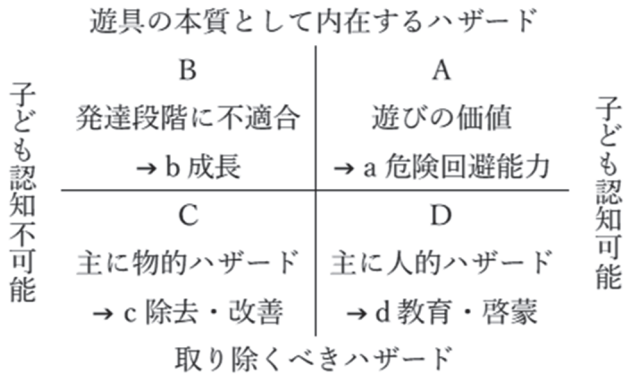

図１　概念構成図(野田ら,2018)

概念構成図は、ハザードを遊具に内在する危険性ととらえ、遊具の本質として内在するハザードと、取り除くべきハザードにわけている。また、「子どもが危険を認知できるか否か」という軸を援用し、２つの軸をクロスさせ、危険性を４つの事象にわけている。

第１象限（A）は、遊具の本質として内在するハザードのうち、子どもが認知可能な危険性であり、遊具の遊びのワクワクドキドキや克服による達成感など遊びの価値を生み出す遊具の構造そのものである。この領域で生じるリスクについては、子どもの挑戦意欲、運動能力を発達させるための必要悪として、ある程度、保育者も保護者も許容しなければならない、しかしながら、それが重篤な怪我にならないように、保育者の援助や落下面のクッション化など、必要な対策はとるべきである。このハザードに対する対応策(a)としては、遊びを通して子どもの危険回避能力を高めていくことである。第２象限（B）は、遊具の本質として内在するハザードのうち、子どもが認知不可能な危険性であり、遊具に適さない発達段階の子どもや障害のある子どもが遊具に接することによって生み出される危険性である。子どもの発達や認知レベルにより、このハザードが生み出すリスクは変化する。このハザードに対する対応策(b)としては、適した発達段階に達成するまで、あるいは安全に遊べるだけの理解力を獲得するまで成長を待つことである。第３象限（C）は、遊具に本来あってはならない取り除くべきハザードのうち、子どもが認知することが難しい危険性である。多くは物的ハザードであり、思わぬ事故につながる。このハザードがあるとリスクの頻度と重篤度は高くなる傾向がある。このハザードに対する対応策(c)は、保育者の日常的な安全点検や専門家（業者）の定期検査により発見し、徹底的に除去し、改善することである。第４象限（D）は、遊具に本来あってはならない取り除くべきハザードのうち、子どもが認知できるように働きかけていくことのできる危険性である。多くは人的ハザードであり、可動式遊具に近づいたり、誤った遊び方をしたりすることにより生じる。このハザードは、遊びに適した発達段階に達してはいても、視野が狭かったり、注意力散漫で保育者の説明をよく聞いていなかったりする子どもにリスクをもたらす。このハザードに対する対応策(d)は、遊び始める前の十分な指導、間違った行動が見られた時の遊びの制止と指導となる。

本研究では、山口大学教育学部附属幼稚園で実施しているヒヤリ・ハット会議において、概念構成図(野田ら,2010)を用いてヒヤリ・ハットデータを整理することで、以下のような内容が期待できると考えた。①重篤な怪我につながる環境を早期発見、早期対応することができる。②ベテラン保育士さんからの経験則から習得しているハザードとリスクの見極めと適切な対処法を保育者全体で共有することができる。③毎週行うことで、経験の蓄積をすることができ、また現場では瞬時に判断し行動を求められる場面で生かすことができる。

これらから、概念構成図を活用したヒヤリ・ハットデータの分析を保育者と共通理解することで、保育者の専

門性を高めることができ、リスク軽減のために環境を整えることができると考えた。

本研究では、ヒヤリ・ハット会議の内容を分析し、その内容の傾向を概念構成図活用前後で分析することと、ヒヤリ・ハット会議の実施において保育者にとってどのような役割を果たしたかを明らかにすることを目的とした。

Ⅱ　研究方法

調査期間は令和5年5月～令和6年3月であり、対象はヒヤリ・ハット会議に参加した保育士11名である。

毎週金曜日を基本とし、ヒヤリ・ハット会議を実施した。ヒヤリ・ハット会議では、園庭図を映し出し、まず養護教諭から1週間分のヒヤリ・ハットだと感じた事例について報告し、担任がその状況について説明を行い補足することとした。報告された事例について保育者全員で対策を考察し、養護教諭が園庭図の中に記録をとっていく。また、その他ヒヤリ・ハットだと感じた事例について保育士から報告してもらい、保育者全員で対策を考察し、記録をとっていくこととした。5月から10月の10回では以上のように実施し、11月から3月の10回では概念構成図を活用し、保育者は概念構成図の視点をもって考察を実施した。ヒヤリ・ハット会議で分かったCの物的ハザードの除去を速やかに行い、毎年注意必要な箇所は、園庭図に書き込み掲示し、保育士が確認できるようにした。

Ⅲ　データの収集方法と分析方法

1．ヒヤリ・ハット会議の内容について

ヒヤリ・ハット会議で出た課題について、概念構成図に照らしあわせ4事象に分類し日付ごとに整理した。また日付ごとに4事象の件数を記録した。また、4事象の件数の分析と、4事象の数とその課題の内容がヒヤリ・ハット会議を続けていくことでどう変化したか、また概念構成図を活用する前後でそれらに変化があったか検討した。

2．保育者へのアンケートの実施

ヒヤリ・ハット会議に参加した保育士11名（副園長、保育士、補助）を対象に、紙面または口頭でヒヤリ・ハット会議を実施し、以下の内容について聞き取りを実施し、その内容について検討した。

①新しく（知識として）気付いたこと
②改めて確認できたこと
③新しい指導方法を知れたこと
④改めて確認できたこと
⑤ヒヤリ・ハット会議とその関連によって保育者の子どもへの介入・保育等によって、どのような子どもの変化があったか
⑥今後ヒヤリ・ハット会議で触れてほしい内容・視点・改善したほうが良い点

Ⅳ　結果・考察

全20回実施したヒヤリ・ハット会議で出た課題数は表1と表2に示す通りである。概念構成図導入前後での課題数の比較をすると、概念構成図導入前ではA:2件、B:0件、C:30件、D:29件の合計61件であった。概念構成図導入後では、A:8件、B:0件、C:20件、D:7件の35件であった。ヒヤリ・ハット事例については、発生が常に一定で起き続けるものではなく、さらにヒヤリ・ハット会議の実施によって同じようなケースが発生しにくいことなどが考えられるため、合計数での比較は難しいが、A事象の数に増加がみられ、C事象、D事象に減少がみられた。これはC事象、D事象ともに取り除くべきハザードであり、その視点よりも遊びの本質に目を向けるようなA事象に保育者の意識が変化していった可能性を示している。ヒヤリ・ハット会議の途中で概念構成図を導入した理由には、「ある程度の怪我を通して怪我をしないための知識を得ている。しっかり体を使って遊ぶことで筋肉など発達し怪我をしにくくなる。」「あれもダメ、これもダメにすると子どもたちが何して遊んでいいかわからなくなる」「子どもと一緒に怪我をしないための方法を考えたい」といった保育者の思いがあった。このことから、ただただ危険だからと禁止にするよりも遊びの本質に向き合っていき、子どもたちの思いや成長により一層目を向けることでA事象が増加したと考えられる。各事象での数の比較をするとB事象は1件もなく、次いでA事象が少なく、最も多いのはC事象となった。B事象は発達段階に不適合などの場合のハザードであり、保育を長年続けているノウハウから発達段階に不適合な場面というものは発生しなかったと考えられる。一方、最も多かったC事象は、物的に除去・改善が必要なハザードであり、危険な環境や遊具の状態は常に発生しやすく気付きやすいものであるため数が多くみられたと考えられる。

表3と表4は概念構成図活用前後のヒヤリ・ハット会議で出た特徴的なヒヤリ・ハット事例と対応についてであり、表5は保育者へのヒヤリ・ハット会議・概念構成図に関するアンケート結果である、表6はヒヤリ・ハット会議に基づく子どもへの保育によって、どのような子どもの変化があったかについての調査の結果である。全体的な傾向として、園庭遊具だけではなく、実のなる木々や自然に住んでいる生き物たち、起伏のある森のような園庭がある対象園の特色から、木々やそれに伴う虫などに関わる事例が多くみられた。また、季節性のものも多くみられ、特に雨天や雪、寒さでの凍結なども事例とし

表１　概念構成図活用前のヒヤリ・ハット会議で出た課題数

	5/19	5/26	6/9	6/26	7/7	9/8	9/21	9/29	10/20	合計
A							1		1	2
B										
C	6	7	3	2	3	3	2	3	1	30
D	3	8		4		3	2	2	7	29

表２　概念構成図活用後のヒヤリ・ハット会議で出た課題数

	11/10	11/17	11/24	12/1	12/8	1/22	1/26	2/14	3/8	合計
A	1	1	1	1	3				1	8
B										
C	3	4		1	3	1	7	1		20
D	1	2	1	1	1	1				7

て挙げられた。これらについては、様々な環境の中で子どもたちを保育していくという園の狙いからやむを得ない事例と考えられるが、適切な対応と教育によって十分にリスクを下げられるものだと考えられる。概念構成図活用前後で比較すると、概念構成図活用前では、危険な事例については、禁止や環境の変更、適切な指導によってリスクやハザードから遠ざけていくことを中心とした事例が多く挙げられた。保育者は子どもには怪我をしてほしくはないといった思いは共通して持っており、如何にして怪我から遠ざけるかといった視点が強くあったともいえる。一方、ヒヤリ・ハット会議を通して、「ある程度の怪我を通して怪我をしないための知識を得ている。しっかり体を使って遊ぶことで筋肉など発達し怪我をしにくくなる。」「あれもダメ、これもダメにすると子どもたちが何して遊んでいいかわからなくなる」「子どもと一緒に怪我をしないための方法を考えたい」といった保育者の思いが出てきたように、何がなんでも禁止にするのが子どもの成長にとって良いわけではないというのは保育者の中にも存在していたことが、ヒヤリ・ハット会議途中から概念構成図が導入されたことからも理解できる。概念構成図の導入は、西田(2010)の、保育者の監督のもとではあるが、子どもに自由に遊ばせながら危険察知能力を高めさせることが重要という視点からもヒヤリ・ハット会議を効果的に運用する非常に有効な手立てだったと考えられる。概念構成図の活用後の事例をみていくと、活用前にみられた禁止や環境の変更、適切な指導による対応ではなく、子どもの思いに目を向け、一緒にどうしたらいいか考えていく事例がみられた。これは表４のＡ事象の①一方、よく跳べるようになってきている。②隠れる場所を探してアスレチックへ移動している。アスレチック以外の場所の提案をしてみる。③場所の提案をし、園児は納得し楽しく遊んでいた。④ブランコ遊びの経験不足もあるのではないか。⑤一方、ジャンプがとても好きになってきている。自分の身体が思ったより動くことに楽しさを感じている。といった記述からも読み取ることができる。また、表５のヒヤリ・ハット会議実施後の調査においても、ジャンプすることの楽しみがでてきたため、子どもの成長過程を観察して、子どもの動き、身体の使い方、やりたいことを見取って、園児にはやってみたくなる、できると思う気持ちがあるが、危ない環境は作らない、といった子どもの姿や欲求に目を向けたコメントが多くみられ、ヒヤリ・ハット会議を通して、保育者の視点が変化していった可能性があることがわかる。

表６では、ヒヤリ・ハット会議についての有用性が挙げられ、特に①会議で子どもの行動の話題を共有し、１年通して子どもの観察をして行動の変化を共有できた。継続して指導していることをお互いで確認できた、といった保育者間での情報の共有と②毎週ヒヤリ・ハットに特化して会議をしたことで、課題を持ち続けて取り組めた。③保育者が課題意識を持っていることが子どもにも伝わり、子ども自身の意識や言葉が変わった。のように保育者が課題意識を持ち続けることができたことが挙げられた。これは、概念構成図活用のヒヤリ・ハット会議で期待した内容でもあるハザードとリスクの見極めと適切な対処法を保育者全体で共有することができる、毎週行うことで、経験の蓄積をすることができ、また現場では瞬時に判断し行動を求められる場面で生かすことができる、といった部分に寄与したと考えられる。また、研究で期待した内容の他の視点として重篤な怪我につながる環境を早期発見、早期対応することができるといったものがある。これについては、重篤な怪我は定期的に発生するものではないため、早期発見早期対応に効果的だ

ったかは判断が難しいが、表４にあるように④グリーンマットがあるため軽傷で済んだ。⑤帽子を被っていたため軽傷で済んだ。⑥上靴を履いていたため、軽傷で済んだ。などのように、適切な指導や対応を丁寧に続けていた結果、重篤な怪我に繋がらないようなことができたと考えられる。

表３　概念構成図活用前のヒヤリ・ハット会議で出た特徴的なヒヤリ・ハット事例と対応

Ａ：遊びの価値
①新聞紙の剣で戦っていた時、たまたま友達の剣が目にはいったため、 剣での遊び方の話し合いをする。道具や硬さの調整の検討。 ②汽車遊具の周りを走り回り子ども同士でぶつかる。物を持ちながら走る。少しの坂で転倒する。 特に顔から転倒する子が多い。 経験させながら、大きな怪我をしないように、追いかけごっこやしっぽとりのような前段階の鬼ごっこを仕組んでいく。
Ｃ：物的ハザード
①すべりやすいマンホールの上にマットを設置。 ②毛虫・蜂・ムカデなどの発生では、防虫剤・殺虫剤・近寄らない指導。 ③ツリーハウスデッキから転倒があり、大怪我防止のため土をかぶせる。 ④築山の土が痩せ、コンクリートが出てきている。 ⑤ケヤキの根っこが出てきており、転倒の危険性がある。マットの設置。業者に土をいれてもらう。一時的に立ち入り禁止に。
Ｄ：人的ハザード
①ドアの輪型の取っ手に手をいれないように指導する。 ②廊下を走る演示が多く、園児同士でぶつかるため、保育者が指導。 ③教材室の出入りで扉に指を挟むことがあり、教材室には入らないように指導。 ④硬いおもちゃをもって大型ブロックから落としてしまい園児にぶつかったため、硬いものを持って大型ブロックに登らないよう指導。 ⑤段ボールカッターで指を切ることがあり、使い方の指導と見守りの確認。 ⑥大型ブロックからの跳び下りで顎をぶつけたため、大型ブロックでの飛び移りを禁止。 ⑦箱積み木の上で戦いごっこをして転倒したため、箱積み木の上での戦いごっこを禁止。

表４　概念構成図活用後のヒヤリ・ハット会議で出た特徴的なヒヤリ・ハット事例と対応

Ａ：遊びの価値
①ジャンピングマットをしている時に反対方向からきた友達とぶつかったり、マットの間を飛び移っているときに友達にぶつかることがあり、サーキットの作り方を検討。一方、よく跳べるようになってきている。 ②アスレチックでの頭部打撲があった。隠れる場所を探してアスレチックへ移動している。アスレチック以外の場所の提案をしてみる。 ③鬼ごっこ時にアスレチックで鬼同士がぶつかる。ルールを自分たちで決めているが、場所の提案をし、園児は納得し楽しく遊んでいた。 ④保育者が不在の時にブランコ遊びをし、不安定なブランコの乗り方をし、転倒した。約束していた通り、保育者に伝えて移動することを改めて指導する。ブランコ遊びの経験不足もあるのではないか。 ⑤石の階段をジャンプして踏み外し転倒する。一方、ジャンプがとても好きになってきている。自分の身体が思ったより動くことに楽しさを感じている。ジャンプ遊びの環境を作る。 ⑥大型ブロックは通年怪我が多い。使い始める時期を見極めたり、使い方を検討する。

C：物的ハザード
①クスノキの枝が折れていたため撤去。強風などの前後は環境の変化に注意する。 ②ホワイトボードのネジが劣化してもろくなっていたため、購入検討。移動の際には子どもだけでは移動させない。 ③芝生定着前に周辺で転倒し杭にぶつかったため、杭の撤去や芝生定着まで登らないように指導。 ④庭で転倒したが、グリーンマットがあるため軽傷で済んだ。 ⑤下を向いて走っていて木に頭を擦ったが、帽子を被っていたため、軽傷で済んだ。 ⑥道具箱を取り出す際に足に落としたが、上靴を履いていたため、軽傷で済んだ。 ⑦雪や雨の日に廊下が滑りやすい。普段と違うマットを敷くことで意識して歩くように。凍結予防のためにブルーシートを敷いておくなどする。
D：人的ハザード
①ウサギ小屋の掃除の際に蛇がでてきたため、注意喚起した。 ②ぶら下がり遊びをしていて、手が離れて身体をぶつけた。自らの遊びでヒヤッとした経験も必要なのでは、ぶら下がりたい気持ちや揺れを楽しみたい気持ちも大事にしたい。 ③雨の日や前日雨の場合、滑って転倒する園児が多い。

表５　保育者へのヒヤリ・ハット会議・概念構成図に関するアンケート結果

定期的なヒヤリ・ハット会議の実施によって
新しく(知識・情報として)気付いたこと、確認できたこと (A)遊びの価値の観点 ①ジャンプすることの楽しみがでてきたため、サーキットの作り方や待つ場所などの場の工夫が必要。 (C)物的ハザードの観点 ①子どもの成長過程を観察して用具の場所を決める。 ②濡れていたり凍っていたりすると危ないことがわかるが、ジャンプの仕方でも危ないことがわかった。 ③子どもの動き、身体の使い方、やりたいことを見取って環境整備する。 ④木に関する修繕が多くあった。古くなってきているため、外部の力が必要。 (D)人的ハザード観点 ①毒の有無に関わらず、毛虫を見つけたときは先生に伝えさせる。 ②廊下を走る子どもには都度声掛けをしていく。もう大丈夫ではないかと保育者が思わないようにする。 ③園児にはやってみたくなる、できると思う気持ちがあるが、危ない環境は作らない。
新しい指導法を(子どもとの関わりの中で)知れたこと、確認できたこと (A)遊びの価値の観点 ①怒られて委縮して動けなくなる性格の園児は注意する。 (C)物的ハザードの観点 ①イラガの実物を見せることで子どもたちと危険性を確認できた。 (D)人的ハザード観点 ①知らない昆虫に関しては大人を頼りにする。保育者が正確な情報を伝えることができるように、知識と情報の更新が常に必要。 ②年長になると動きがダイナミックになってくる。保育者が気をつけることを子どもたち自身も考えることを大事にしたい。

表６　ヒヤリ・ハット会議に基づく子どもへの保育によって、どのような子どもの変化があったか

①会議で子どもの行動の話題を共有し、１年通して子どもの観察をして行動の変化を共有できた。継続して指導していることをお互いで確認できた。 ②毎週ヒヤリ・ハットに特化して会議をしたことで、課題を持ち続けて取り組めた。 ③保育者が課題意識を持っていることが子どもにも伝わり、子ども自身の意識や言葉が変わった。 ④子ども同士で注意しあえるようになった。日頃保育者が伝えていることが子どもにおりてきている。 ⑤保健室での掲示により、怪我した場所を具体的に伝えるようになった。保護者にも自分で伝えることができる。自分のことを話すことができるようになった。
ヒヤリ・ハット会議で触れてほしい内容・視点・改善したほうが良い点
①保育中に今ヒヤリ・ハットだ！と思う瞬間に、すぐ記録したい。後では忘れてしまうことがある。 ②過去の印象をつなげやすくするため、怪我した場所の写真をとって印象づける。 ③ヒヤリ・ハット会議と環境整備の時間を調整していく。 ④ヒヤリ・ハット会議をしていたため意識できていた。 ⑤子どもたちが遊びの中やクラス全体で確認をしていく。 ⑥タブレットで撮影したため子どもたちが理解しやすい。 ⑦毎週、安全について話し合うことで気をつけようと思う。みんなで共有できることがありがたい。

Ⅴ　まとめ

本研究では、山口大学教育学部附属幼稚園において概念構成図を活用したヒヤリ・ハット会議を定期的に実施することで保育者にとってどのような役割を果たしたかをヒヤリ・ハット会議で出た課題やヒヤリ・ハット会議実施後のアンケート調査から明らかにすることを目的とした。その結果、概念構成図活用前後において、保育者のハザードに対する対応の考え方に変化がみられ、禁止や環境の変更、適切な指導による対応ではなく、子どもの思いに目を向け、一緒にどうしたらいいか考えていく姿への変化がみられた。

本研究では、概念構成図を活用したヒヤリ・ハット会議は１年目の実施であり、保育者の支援方法にまでは手が回っておらず、効果的な支援内容について検討していくことや、継続的な運用で保育者の専門性にどのように影響を与えていくか検証していく必要がある。また、ヒヤリ・ハット会議で出た課題について園内の環境整備の時間と効率的に連携させていくことが課題である。

引用文献

金子嘉秀・境愛一郎・七木田敦（2013）幼児の固定遊具遊びにおけるルールの形成と変容に関する研究. 保育学研究，51⑵．176-186

ミズマ・モニカ・マリ（2007）園庭の大型固定遊具の変化に伴う幼児の遊びの変容―はしごからすべり台へ．早稲田大学大学院教育学研究科紀要 別冊，（15-2）．119-130

西田佳史・本村陽一・北村光司・山中龍宏　（2010）子どもの日常行動の科学に基づく遊具のデザイン，オペレーションリサーチ．経営の科学，55⑻．466-472

野田 舞,・山田 真紀(2018) 園庭遊具の遊びの価値と安全性を高める方法についての実証的研究
―ハザードとリスクの概念を中心に―．保育学研究．56(2)．39-50